CDEJ

Certified
Diabetes
Educator of
Japan

一般社団法人
日本糖尿病療養指導士
認定機構

理事長メッセージ

必要とされる“CDEJ・日本糖尿病療養指導士”

厚生労働省が行った国民健康・栄養調査によると、わが国で糖尿病が疑われる人、可能性を否定できない人を合わせると、総人口の約6人に1人が糖尿病・予備群であり、また高齢糖尿病患者については、増加の一途をたどる等、その対策は国家的課題といえます。
このような多くの糖尿病患者・予備群に対し、糖尿病専門医の数は限られており、適切な糖尿病診療を目指すためには、非専門医との良好な病診連携や、熟練されたコメディカルスタッフとのチーム医療の体制を構築することが極めて重要であると考えられています。

わが国では、2000年に「日本糖尿病学会」「日本糖尿病教育・看護学会」「日本病態栄養学会」の三学会が母体となる、「日本糖尿病療養指導士認定機構」が設立され、「**日本糖尿病療養指導士（CDEJ**：Certified Diabetes Educator of Japan）」の資格認定を行っております。アメリカにおいては1986年、同じようなしくみ（AADE）が制度化され、多くの実績を上げています。

このCDEJの主な役割は、医師の指導のもと、幅広い専門知識と技術を持ち、患者との良好な信頼関係を構築しつつ、個々人に対して、最適な療養指導を行うことにあります。糖尿病は、生命に関わるような重篤な自覚症状の乏しい病気であることから、まず、患者本人に正確な知識・技術を身に付けていただくことと、療養継続のモチベーションを持っていただくことが重要となります。
また、個々の職種が、自己の領域だけで適切な療養指導を行うことは非常に困難であり、他職種との連携が不可欠であります。そして、多くの場合、地域医療連携を活性化するチーム医療の絆としてもCDEJが活躍しています。

本機構の設立16年目にして、CDEJの資格保有者は19,000人超になりました。今やその存在なしでは高度・良質な糖尿病診療の提供が極めて困難な状況になっています。厚生労働省は2012年春、実質的な評価として、糖尿病診療における多職種からなるチーム指導の重要性を診療報酬という形で公的に評価しました。行政よりCDEJの評価を得たことは、今後のCDEJの地位向上と認知向上、自己啓発促進に結びつき、そのことにより糖尿病患者の予後、QOL（生活の質）の向上にも貢献できるものと期待されます。
本機構はこれからも、患者が本来備えている自己管理能力や自律性を最大限引き出す、意欲ある有能なCDEJを世に送り出し続けたいと思っています。

日本糖尿病療養指導士認定機構
理事長　寺内 康夫
横浜市立大学 内分泌・糖尿病内科学教授

CDEJ（日本糖尿病療養指導士）とは

Certified Diabetes Educator of Japan; CDEJ

CDEJ（日本糖尿病療養指導士）とは、糖尿病治療にもっとも大切な自己管理（療養）を患者に指導する医療スタッフです。
高度でかつ幅広い専門知識をもち、患者の糖尿病セルフケアを支援します。
この資格は、一定の経験を有し試験に合格した看護師、管理栄養士、薬剤師、理学療法士、臨床検査技師に与えられ、2001年3月に第1回認定試験が行われました。
CDEJに認定されることは、糖尿病の臨床における生活指導のエキスパートであることを意味します。
糖尿病患者の療養指導は糖尿病の治療そのものであるとする立場から、患者に対する療養指導業務は、わが国の医療法で定められたそれぞれの医療職の業務に則って行われます。
米国、カナダ、オーストラリアなどでは1970年代の初頭より、糖尿病療養指導従事者の専門性と認定について検討され、1986年には資格としてCDE（Certified Diabetes Educator）制度が発足し、実績を積んでいます。
医療は日々進歩しますので、CDEJとして認定された後も引き続き実践と研鑽を重ねて最新の知識・技能を身につける必要があります。このため、CDEJの認定制度は5年毎の更新制となっています。

看護師 CDEJの声

グローバルな支援が求められている

大橋 優美子
東京大学医学部附属病院（東京都）［第1回（平成12年度）CDEJ 取得］

「日本でもCDE制度ができるから受験しない？」と先輩に誘われ、CDEJの資格を得ました。患者さんやそのご家族と一緒に悩んだり、悲しい思い、嬉しい思いを分かち合い、患者さんご自身の中にある「答え」を探し出すお手伝いをしながら、多くのことを深く学んだ15年間です。
最近は日本の糖尿病医療チームに関心を持ち、海外から受診を希望される患者さんが大勢います。特にアジアからはセカンドオピニオンで受診をされ、通訳を介して、また、いろいろな媒体を駆使して指導を行っています。在日外国人などへの対応も多く、グローバルな支援が求められていると実感しています。国内外を問わず、文化の違いなど一筋縄ではいかないことも多いですが、チーム一丸となり、「患者さんのために」を合言葉に、CDEJに+αした知恵を働かせて奮闘しております。

はじめは異動したばかりで一人ぼっちのCDEJでしたが、今では院内に57名のCDEJの仲間がいます。一人は孤独で辛いですが多くの仲間がどこかで同じように頑張っている、そう考えるとなぜかしら力も湧いてきます。院内外・職種を問わず、これまでバラエティに富んだCDEJと活動しました。これからも全国津々浦々のCDEJと交流を重ね、さらなる成長を目指します。

管理栄養士 CDEJの声

気軽に相談できるCDEJでありたい

小犬丸 恭子
中津市民病院（大分県）［第1回（平成12年度）CDEJ 取得］

当院は大分県北部に位置する地域の基幹病院で、私は平成10年に赴任しました。赴任してすぐに感じたことは糖尿病患者さんの多さです。そこで平成12年に第1回CDEJ認定を取得しました。
現在の主な業務は、入院・外来の集団糖尿病教室、個人栄養指導、また担当する外科病棟では周術期やがん化学療法中の栄養指導も行っています。平成28年度の診療報酬改定でがん患者さんの栄養指導料が算定できるようになり、栄養指導の幅も広がりました。がんと糖尿病を併存している患者さんも、栄養指導を望んでいることがわかりました。

平成23年には大分県北部の医師とCDEの認定資格を持つスタッフの協力で、地域の医療貢献とCDEのレベルアップを目的に、大分県北部CDE研究会を立ち上げました。年に1度CDE実践セミナーでは外部講師を招聘し開催しています。「コーチング」、「食事療法」、「運動療法」等すぐに業務に活かせる内容で行っています。また年に1度は他の医療機関の患者さんを集めて、地域の糖尿病教室を開催しており、多職種のスタッフとの情報交換の場にもなっています。
糖尿病患者さんが気軽に相談してくれるようなCDEJでありたいと考えています。常に新しい知識を得ることを怠らず、患者さんに健康人と変わらないQOLを維持してもらえるように、今後も療養支援を行っていきたいと思っています。

チームでタイムリーな支援を

柴田 優里
石垣島徳洲会病院（沖縄県）［第16回（平成27年度）CDEJ 取得］

私は今、透析室で患者さんと関わっています。これまで東京で療養指導をしてきましたが、大きな違いは、患者さんと医療者の距離の近さです。患者さんの暮らしを手に取るように見ることができ、深く理解することができるため、患者さんやそのご家族にとって無理のない目標を共に考えたり、時に目標変更を勧めるなど、チームでタイムリーに支援することを心がけています。
土地柄、南国の果実が豊富で食卓に上ります。患者さんが食事の楽しみを失わずに糖尿病と上手に付き合えるために、一日の食事量のバランスを考えて、どのように間食をするか患者さんの生活をもとに話し合います。また、血糖測定前は必ず流水で手を洗う指導などの具体的な支援もその一つです。
私は、CDEJの先輩方の根拠に基づいた指導に魅了され、CDEJになりたいと思いました。そして、CDEJの認定を取得したことで、糖尿病の知識が増え、患者さん自身がセルフケアするための方法をたくさん考えられるようになりました。今後も、「頑張ってもうまくいかない」と思っている患者さん方に寄り添い、個々に合わせた支援をチームで考えていこうと思っています。

今後も誕生する多くのCDEJと共に

金森 恵佑
金沢医科大学病院（石川県）［第13回（平成24年度）CDEJ 取得］

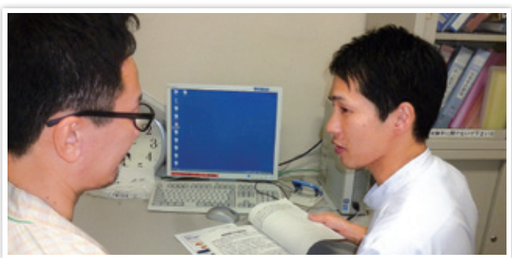
私は普段、栄養指導の場面で糖尿病患者さんと接しています。当院は大学病院という特性もあり、県内北部を中心に地域から紹介された合併症をお持ちの糖尿病患者さんも多く来院されます。そのため、処方されている薬剤の種類・量も多く、栄養指導はそれらも考慮した支援が必要とされます。私はこういった複雑な病態の患者さんへの栄養指導に力不足を感じ、CDEJの認定を取得しました。
取得後は薬剤や合併症に対する理解が深まりました。その結果、複雑な病態を難しい食事療法として患者さんに伝えるのではなく、患者さんの生活を聞き取り、実行しやすい内容へ変換して伝えることが出来るようになったと思います。また、糖尿病患者さんの心理や行動変容ステージを学んだことで、患者さん個々の状態に応じて目標設定をする、きめ細かな栄養指導も行えるようになりました。私はCDEJを目指すことで、多様な糖尿病患者さんに対してQOLを考えた療養支援が出来るようになったと思います。
今後も誕生する多くのCDEJと共に糖尿病患者さんの支えになりたいと思います。

薬剤師 CDEJの声

CDEJとして活動の場を広げていきたい

坂倉 圭一
東京医科大学病院（東京都）［第9回（平成20年度）CDEJ 取得］

私は現在、糖尿病代謝内分泌内科・リウマチ膠原病科・整形外科病棟の担当薬剤師として勤務しています。また、糖尿病チームの一員として入院患者さんを対象にした糖尿病教室の開催やスタッフ向けの勉強会などを行っています。
病棟に配属されたのを機に、CDEJ認定取得を目指し症例をまとめたり勉強したりすることで、糖尿病の病態や患者さん心理などについて理解を深めることが出来ました。CDEJ認定取得後、今までの自分は患者さんにインスリンや薬の説明を行うだけで、患者さんの声に耳をあまり傾けられていなかったのだと自覚したのを覚えています。それからは患者さんの声に耳を傾けるように心掛けると、患者さんもこちらに耳を傾けてくれるようになりました。そして、患者さんが退院後に元気な顔をして自分を訪ねてきてくれた時は嬉しくやりがいも感じます。また、当院は駅からのアクセスもよく、大学病院ということもあり、他の疾患で糖尿病を合併している患者さんも多いです。自分の担当病棟以外から相談を受けることもあり、CDEJの資格を活かすことが出来ます。
今後はCDEJとして活動の場を広げていき、1人でも多くの患者さんに貢献できるように頑張っていきたいと思います。



患者さんとの会話を大切に

青木 裕香
NTT東日本札幌病院（北海道）［第15回（平成26年度）CDEJ 取得］

現在、病棟業務として服薬指導やインスリン導入指導を行うほか、週に1度糖尿病教室で講義を行っています。
また、院内の糖尿病療養指導士研究会に所属し、他職種と連携を取りながら年に3回院内で行われる糖尿病療養指導士セミナー、世界糖尿病デー等の活動に携わっています。
CDEJは、糖尿病の患者さんとの面談を繰り返す中で、患者さんの気持ちに働きかけることがアドヒアランスの向上やインスリンのスムーズな導入に繋がると感じ、そのためには糖尿病に関する知識、専門性を高める必要があると思ったことから取得を志しました。
それまでは糖尿病に関する知識が少なく、服薬指導時も薬効と副作用の説明を行うだけでしたが、CDEJ取得後は患者さんと会話を行うことに重点を置き、そこから一人ひとりの生活習慣に合った指導を心がけることが出来るようになりました。指導時に患者さんから「色んな職種の方がこれだけ私の為に頑張ってくれているのだから私も頑張らなくちゃね」と、前向きな気持ちを伝えてくださったことがとても嬉しかったです。
北海道は言わずと知れた雪国です。冬の寒さは厳しく、路面は雪や氷で覆われているため外出の機会が減ることから運動不足になりがちです。私は薬剤師ですが、CDEJとして運動や食事についても患者さんにアドバイスを行えるよう、幅広い知識を身に着けることも大切だと感じています。また今後は院内だけでなく、地域の患者さんとも関わる機会を多く持ち、療養指導に携わっていけたらと思います。

臨床検査技師 CDEJの声

臨床検査技師の専門性を生かして

工藤 真理子
青森県立中央病院（青森県）［第2回（平成13年度）CDEJ 取得］

糖尿病教室（教育入院）では、病気の理解度を深めるため、本人のHbA1cや血糖値を示し、参加型・対話方式で説明しています。講義では「検査値の見方知っていますか？」ともらった検査結果を本人が有効活用できるよう工夫を凝らして説明しています。

SMBG・POCT機器の導入時検討、看護師や医療スタッフへの研修・企画（検査の意義や機器使用時の留意点）等は、臨床検査技師の専門性を生かした院内CDEの質向上・チーム医療の役割と思い行っています。また、糖尿病は様々な疾患と関わるためCDEJの知識や経験を活かし、NST、肝臓病教室等にも参画しています。
地域活動としては、「LCDEの日常業務に役立つ講習会をしたい！」という思いのCDE 7名（臨床検査技師、看護師、管理栄養士）でグループを立ち上げ、「みんなどうしてるの？糖尿病療養指導」をテーマに、模擬患者に指導する実演形式の研修会を企画開催しています。

対話を通じて必要な情報をしっかりと

酒井 隆弘
日本赤十字社長崎原爆病院（長崎県）［第13回（平成24年度）CDEJ 取得］

2013年に糖尿病療養指導チームに入り、糖尿病教室を担当するようになりました。他職種のメンバーとの関わりの中で、検査技師として患者さんに寄り添った糖尿病診療にもっと深く関わりたいと考え、CDEJ認定取得を決意しました。
チームの中での役割は、検査に関する情報の集約と発信です。検査に関する情報を集約することで、SMBG・POCT機器の点検や機器更新に向けての検討などを積極的に行うようになりました。検査項目や検査機器の機能について最新の情報をチェックしてチームに提供し、院内での活用方法について日々検討を行っています。
患者さんに対しては、CDEJ認定取得後は一方的に情報を押し付けるのではなく、対話の中でその患者さんに必要な情報を繰り返ししっかりとお伝えすることを心がけるようになりました。
今後は、検査技師の特性を生かし、患者さんの血糖管理をより簡易に、より正確に実施できるような取り組み、働きかけを行っていきたいと思っています。

理学療法士 CDEJの声

患者さん一人ひとりに合わせた指導計画を

伊藤 郁子
島根大学医学部附属病院（島根県）［第12回（平成23年度）CDEJ 取得］

当院糖尿病ケアチームの中での理学療法士の役割は、糖尿病教育入院、糖尿病教室、糖尿病腎症透析予防での運動指導を行っています。指導内容は画一的なものになりがちですが、患者さん一人ひとり違う生活スタイル、運動習慣、ものの考え方をしているので、カンファレンスで他職種から情報を得たうえで、個別に面接し、その人に合わせた運動プログラムを考えるようにしています。

CDEJ認定取得の動機は院内の栄養士からの勧めであり、他職種の方から、糖尿病の療養指導における運動の必要性を教えられ受験しました。実際、CDEJを取得した後は、多くの糖尿病患者さんと接し、一次予防、二次予防の必要性を実感し、運動を継続することの難しさを学ばせていただきました。島根県はCDEJの理学療法士は現在２人と少なく、糖尿病患者さんの運動療法は積極的に行えていません。理学療法士が糖尿病に対する運動療法の必要性をもっと知る必要があると感じています。県内のCDEJと協力して糖尿病患者さんが運動や健康行動を在宅でも継続していけるようなシステム作りを考えていきたいと思っています。

理学療法士の活躍の場を広げるために

舘　友基
医療法人松徳会花の丘病院（三重県）［第15回（平成26年度）CDEJ 取得］

現在、クリニックの糖尿病内科にて、糖尿病チームの一員として運動指導や糖尿病教室、患者会の運営を行っています。運動指導に携わる中で、患者さん一人ひとりで病態や生活習慣が異なるため、画一的ではなく、オーダーメイドの指導が必要であることを学びました。そのため糖尿病に関して幅広い知識が必要であると考え、平成27年にCDEJ認定を取得しました。CDEJ認定取得後、患者さんから「先生のおかげで運動が楽しく継続できています」と言葉をいただいた際は、自分の糖尿病に関わる医療職としての成長を実感することができました。また、他職種の先生と情報交換を積極的に行えるようになり、更に指導の幅が広がったと感じています。糖尿病における運動の必要性は認識されていますが、未だ理学療法士でCDEJ認定の取得者は少ない現状です。糖尿病治療における理学療法士の活躍の場を広げるためにも、研修会の参加や学会発表等を積極的に行っていきたいと思います。今後、一人でも多くのCDEJが誕生し、多くの仲間と活動できることを楽しみにしています。

各地で活躍するCDEJ CDEJの声

LCDEを含めた県内のネットワーク作り（群馬県）

小野澤 しのぶ
済生会前橋病院（群馬県）［第2回（平成13年度）CDEJ 取得］

群馬県糖尿病療養指導士の会は2003年に群馬県糖尿病メディカルスタッフの会（通称グメスの会1990年設立）の分会として発足しました。当初よりお互いの顔が見える関係を心がけ、その活動に賛同してくださった方の登録は100名を超えています。当会は糖尿病に関わるスタッフ育成や他職種、多施設間の交流を図るための年間計画を組んで、「糖尿病療養指導のための講習会」、「CDEJフォーラム」、「症例検討会」などCDEJの単位認定の研修会を開催し、糖尿病療養指導のレベルアップに努めてまいりました。また、各施設で組織されている支援チームの活動内容を研修会や例会などで紹介してもらい、施設間の情報共有を図っています。さらに、地域貢献として群馬県糖尿病協会の活動を支援し、糖尿病セミナーでの療養相談、地区ごとに行われている血糖無料相談会、1型糖尿病交流会のスタッフや協会の機関誌「ぐんとう」の編集委員を努めるなど、様々な場面でCDEJメンバーが活躍しています。これからも超高齢社会に柔軟に対応するために、LCDEを含めた県内の糖尿病療養指導のネットワーク作りを牽引して行きたいと考えています。

CDEJとの「チーム医療」体制づくりと連携（沖縄県）

仲里 幸康
ハートライフクリニック（沖縄県）［第2回（平成13年度）CDEJ 取得］

現在、沖縄県の日本糖尿病療養指導士資格取得者数は261名となっています。沖縄県日本糖尿病療養指導士会（OCDEJ）は、平成14年に設立しました。今年で14年目を迎えます。開催当初は、6施設間で事務局を1年任期の持ち回りで務めていました。輪番制を実施することで療養指導士への関心が深まり、人材育成の場、そして施設間の連携が広がるようになりました。しかし、時と共に事務局の人材確保等の運営上の問題をきたすようになり、事務局固定化を図ることを思案にいれ、平成24年度からは琉球大学附属病院に事務局を固定化することとなりました。その後は、事務局の機能が安定しています。OCDEJの更新のための研修・講習会は、県外での開催が多く、海で隔てられている沖縄の医療者にとっては、経済的な負担の面から受講困難な状況にあります。県内での単位取得をするため、役員・世話人・糖尿病専門医の協力を得て、県内で各職種1群、2群の単位取得が可能な研修会・講習会を開催しています。研修会では参加者間での情報交換が深まり、活動が活発化しております。研修会・講習会の内容は、スキルアップ研修として、県内外からの医師・コメディカルの講師をお招きして、講演会・実践研修会（フットケア研修会、高齢者疑似体験研修会、コーチング研修会等のグループワークを中心とした研修会）を年間３回～ ４回実施しています。また、OCDEJ会の情報誌として年間２回～ ３回の沖縄CDEJニュースを発行し、各職種の院内外での療養指導の活動状況を掲載した広報誌となっています。また、平成13年にはホームページを立ち上げて、会員OCDEJの皆さんが積極的に活動して頂くための情報基盤として活用しています。

また、平成25年４月に設立した沖縄県地域糖尿病療養指導士会（OCDEL）と共に協力し合うことで活動が活発化しています。

医師の声

全国各地で活躍するCDEJに期待

南　昌江
南昌江内科クリニック（福岡県）

当院は福岡市内にあります糖尿病専門のクリニックで、糖尿病専門医２名、看護師５名、管理栄養士３名、健康運動療法士２名(1名非常勤)、医療事務４名の16名のスタッフでチーム医療を行っています。看護師の５名、管理栄養士の２名はCDEJの資格を有しています。患者さんの95%は糖尿病の方で、そのうち、約25%が1型糖尿病です。年齢層も幅広く、３～97歳までいらっしゃいます。糖尿病の医療は、目覚ましく変化・進歩してきており、我々医療者は、常に新しい知識と技術を身に付けなければいけません。罹病期間や合併症の程度、性格、社会環境、家族環境など、それぞれが異なる患者さん一人一人にあったケアが必要です。スタッフはどのような患者さんにも適切なアドバイスができるよう、日本糖尿病学会学術集会や療養指導学会などに参加し療養指導についての発表をしています。

その他、糖尿病教室や保健所の健康フェアー、ウォークラリー、ブロック講演会など患者、市民向けの行事にスタッフやボランティアとして参加し、血糖測定、栄養相談など担当しています。糖尿病予防から診療まで、院内、院外と広い分野にわたってCDEJの活動は欠かせません。
今後も全国各地でのCDEJの活躍を期待しています。

CDEJへの期待
施設を飛び出し、地域に貢献

松久 宗英
徳島大学先端酵素学研究所糖尿病臨床・研究開発センター（徳島県）

徳島大学病院での糖尿病診療の中心メンバーは内分泌・代謝内科を構成する10名の糖尿病専門医と11名のCDEJです。なかでも、４名の看護師および５名の管理栄養士は、専門性を活かした療養指導に従事し、栄養指導、フットケア、透析予防などで大活躍しています。透析導入患者が国内最多の徳島県ですので、その予防をめざし丁寧な症例検討に基づく重症化リスクへのチーム医療介入を行っています。また、アンチエイジング医療センターでは糖尿病検診を行い、内臓脂肪量、インスリン抵抗性、血管合併症の評価から、最近ではサルコペニアの診断も行い、病態に基づく療養指導を実践しています。
これからのCDEJに期待することは、積極的に地域に出ていき啓発活動や地域のCDEの人材育成にかかわっていただきたいと思います。我々も日本糖尿病協会及び医師会の活動を通じ、啓発イベントや徳島県糖尿病療養指導士の育成の機会を創り、CDEJの積極的参加を推進しています。施設を飛び出したCDEJの活動が可視化できるよう、我々も支援していきたいと思います。

患者さんの声

先生、CDEJ、軽い運動、食品交換表は友達のような存在

私は主治医の先生に聞くまでCDEJ認定機構を知りませんでしたが、機構のパンフレットを読んでみて大変良い組織だと思いました。振り返ってみれば私は1型として25年間糖尿病生活を送っておりますが、大きな合併症の進展はなく、主治医の先生をはじめ栄養士さんや看護師さんがいつもそばにいてくれたからだと感謝しております。高血圧やタンパク尿を合併した私の食事療法は糖分だけでなく塩分制限もありとても大変ですが、頑張ることができているのは皆様の指導のお陰です。病院への要望として、CDEJの方々といつでも気軽に相談できる糖尿病相談室があれば良いと思います。栄養士さんや看護師さんと直接顔を見ながらお話が出来ればとても楽しく勉強になると思います。糖尿病の私にとって、「先生」、「CDEJ（特に栄養士さん）」、「軽い運動」、そして「食品交換表」は友達のような存在です。

近藤 喜代美さん

先生とCDEJの方々の適切な処置、療養指導のおかげ

私はインスリン注射に切り換えてから35年になる２型糖尿病患者です。平成28年7月で80歳になりました。病歴は糖尿病、狭心症「心臓にステントが５本」そして脳梗塞と四つの大病をして合計８回以上の入院をしました。初期の頃は飲み薬でしたが、コントロールが難しく、先生の勧めでインスリン注射に切り換えて、平成18年頃から徐々に血糖値が下がって平成20年頃から手帳の数値に二重丸を戴き、最近は花丸を安定的にもらっています。永年の闘病生活を経てきましたものの、今こうしてインスリン投薬のお世話になりながら、日常の生活を穏やかに、まずは不自由なく送ることができていますことは、ひとえに主治医の先生、そしてCDEJの方々の折々の適切な処置、療養指導のおかげと感謝しております。これからもご指導よろしくお願い致します。

遠田 昇市さん

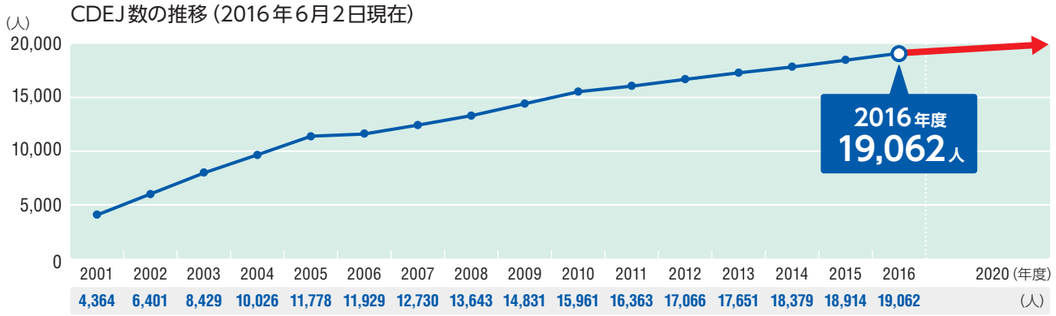
自分の価値観に合った生活を日々満喫できています

私は、持病が多い。それでも68歳の今日現在も元気に暮らせるのは、現代医学の恩恵だと思っています。特に私の糖尿病は１型であり、インスリンが必要ですが、これを自己注射する治療を受けており、病院に縛り付けられるような時間は最小限度です。おかげで自分の価値観に合った生活を、あたかも健康人の様に日々満喫できています。これは慢性病の患者にとって、とてもありがたい医療体制です。このような卓越した医療を支えてくれているCDEJの皆様方に深く感謝申し上げます。

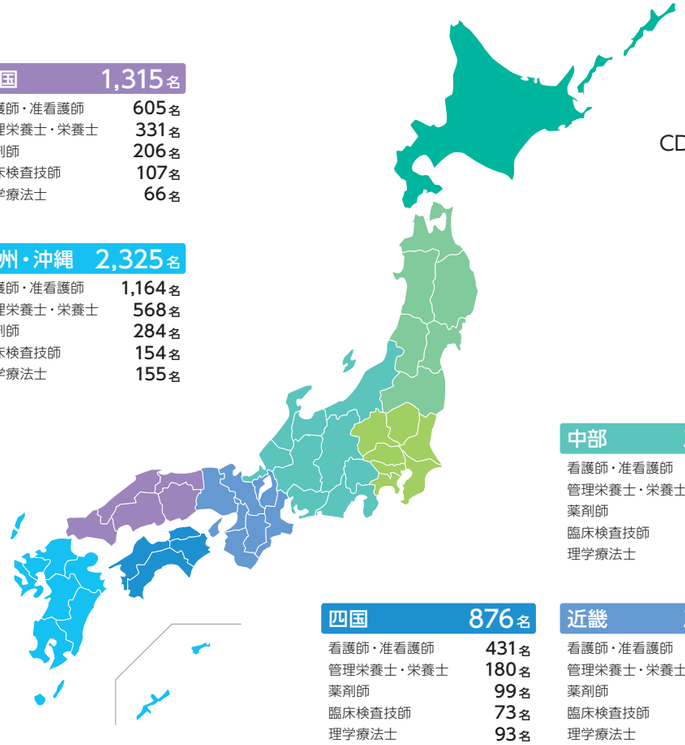
高橋 優三さん

CDEJ数の推移と CDEJ有資格者数（職種別・都道府県別）

CDEJ数の推移（2016年6月2日現在）



CDEJ有資格者数（職種別・都道府県別）



中国 1,315名

看護師・准看護師	605名
管理栄養士・栄養士	331名
薬剤師	206名
臨床検査技師	107名
理学療法士	66名

九州・沖縄 2,325名

看護師・准看護師	1,164名
管理栄養士・栄養士	568名
薬剤師	284名
臨床検査技師	154名
理学療法士	155名

北海道 931名

看護師・准看護師	479名
管理栄養士・栄養士	225名
薬剤師	109名
臨床検査技師	81名
理学療法士	37名

中部 3,586名

看護師・准看護師	1,665名
管理栄養士・栄養士	809名
薬剤師	526名
臨床検査技師	365名
理学療法士	221名

東北 1,275名

看護師・准看護師	680名
管理栄養士・栄養士	300名
薬剤師	177名
臨床検査技師	85名
理学療法士	33名

四国 876名

看護師・准看護師	431名
管理栄養士・栄養士	180名
薬剤師	99名
臨床検査技師	73名
理学療法士	93名

近畿 3,613名

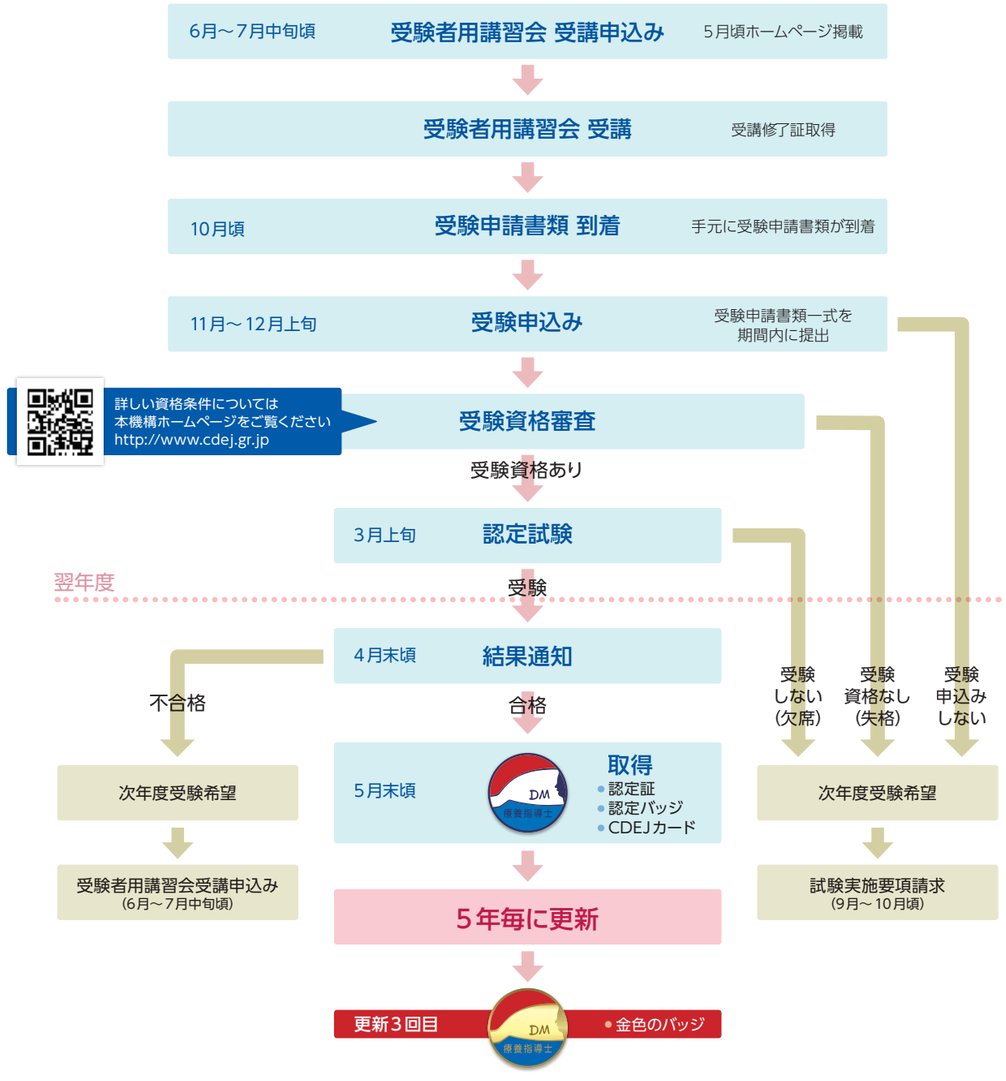
看護師・准看護師	1,593名
管理栄養士・栄養士	878名
薬剤師	646名
臨床検査技師	289名
理学療法士	207名

関東 5,141名

看護師・准看護師	2,278名
管理栄養士・栄養士	1,294名
薬剤師	864名
臨床検査技師	434名
理学療法士	271名

CDEJ（日本糖尿病療養指導士）になるには 資格取得の手続き

「看護師」「管理栄養士」「薬剤師」「臨床検査技師」「理学療法士」いずれかの資格を有していることが必要です。
※まずは受験者用講習会のお申し込みが必須となります。



糖尿病患者の自己管理を指導する エキスパートを目指して！

「CDEJ認定機構」のブースにお立ち寄りください！

日本糖尿病療養指導士認定機構（CDEJ認定機構）は多くのCDEJ他、医療関係者の皆様からご相談、ご意見をお伺いするため、「日本糖尿病学会」「日本糖尿病教育・看護学会」「日本病態栄養学会」の年次学術集会等にブースを設けています。

「CDEJのシンポジウム」にご出席ください！

「日本糖尿病学会年次学術集会」では多職種協働のチーム医療について、現状と課題をテーマにシンポジウムを開催しています。

「日本糖尿病療養指導学術集会」にご参加ください！

「日本糖尿病協会」との共催で開催される集会では、CDEJと多くのLCDEが合同で糖尿病診療におけるチーム医療はどうあるべきか、各職種がお互いを理解し、協働・連携を熱く語り合います！

CDEJシンポジウム（日本糖尿病学会年次学術集会）

日本糖尿病療養指導学術集会

第９回国際糖尿病連合西太平洋地区（IDF-WPR）会議
第４回アジア糖尿病学会（AASD）学術集会

認定更新者用講習会

一般社団法人

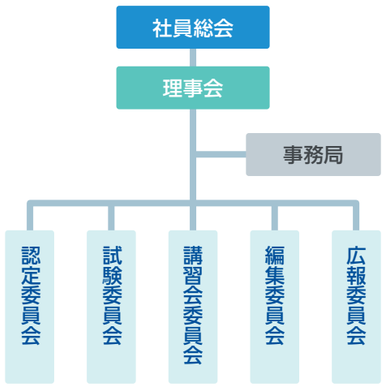
日本糖尿病療養指導士認定機構について

Certification Board for Diabetes Educators in Japan ; CBDEJ

多くの糖尿病患者に対し、専門医の数は限られ、高度かつ良質な糖尿病診療の均てん化を図るためには、専門医と非専門医による「病診連携」と共に、コメディカル・スタッフ（医療法の下で療養指導チームの一員として質の保証された）との「チーム医療」の体制作りが不可欠です。
そのため、チーム医療の体制づくりの一環として、「日本糖尿病学会」、「日本糖尿病教育・看護学会」、「日本病態栄養学会」の３学会が協力し、2000年２月、「日本糖尿病療養指導士認定機構」が設立されました。略称は「CDEJ認定機構」です。

組 織

社員は、「日本糖尿病学会」、「日本糖尿病教育・看護学会」、「日本病態栄養学会」。
役員・委員は上記３学会から選出。



受験資格と認定更新について

詳細は本機構のホームページをご覧ください

http://www.cdej.gr.jp

主な事業

1. 講習会の開催

- 「受験者用講習会」（9月～ 11月、eラーニングで開催。現在は一部会場にても2日間開催）
- 「認定更新者用講習会」（11月～ 2月、全国数都市にて2日間開催。平成28年度よりeラーニング開始）

2. 認定試験の実施

- 年1回認定試験を実施（3月 全国7都市）

3. ガイドブックの発行

- 「糖尿病療養指導ガイドブック」（毎年発行）

4. 認定証の交付

- 認定試験に合格した方・更新を認められた方に「日本糖尿病療養指導士」の認定証を交付

5. 認定資格の審査

- 認定試験受験資格審査、認定更新審査（認定期間の終了時に認定更新を希望する「日本糖尿病療養指導士」に対し認定更新審査を行う）、認定期間延長審査など

6. 広報活動

- CDEJ News Letter・電子版の発行（年４回）
- ホームページの運営、パンフレットの発行、ポスターの作成など

機構ホームページ

CDEJ News Letter

発行：一般社団法人 日本糖尿病療養指導士認定機構
〒113-0033 東京都文京区本郷2-30-7 本郷T&Sビル 3階
TEL. 03-3815-1481　FAX. 03-3815-1487
http://www.cdej.gr.jp

2016年1月発行